徒然草

校注古典叢書

明

校注古典叢書

徒然草

市古貞次校注

明治書院

著者略歴
市古貞次
明治四四年　山梨県生まれ
昭和九年　東京帝国大学文学部国文科卒業
現在　東京大学教授
住所　東京都中野区江原町一―三二―五
著書　中世小説の研究（昭30）など

校注古典叢書
徒然草　¥480

昭和四四年　三月一日　印刷
昭和四四年　三月五日　発行

著者　市古貞次
発行者　株式会社　明治書院　代表者　三樹彰
印刷者　三秀美術印刷株式会社　代表者　茨田兼一
製本　徳住製本所

発行所　株式会社　明治書院
東京都千代田区神田錦町一の一六
電話東京（二九四）五三三六（代）
郵便番号　一〇一
振替口座　東京四九九一番
（検印廃止）

目次

凡例……一〇
本文……一三
序段　つれ〴〵なるまゝに……一三
第一段　いでや、この世に生れては……一三
第二段　いにしへのひじりの御代の……一五
第三段　万にいみじくとも……一六
第四段　後の世の事……一六
第五段　不幸に愁に沈める人の……一七
第六段　わが身のやんごとなからん……一七
第七段　あだし野の露きゆる時なく……一八
第八段　世の人の心まどはす事……一九
第九段　女は髪のめでたからんこそ……二〇
第十段　家居のつきゞしく……二一
第十一段　神無月の比……二三
第十二段　同じ心ならん人と……二三
第十三段　ひとり灯のもとに……二四
第十四段　和歌こそなほをかしきもの……二五
第十五段　いづくにもあれ……二六
第十六段　神楽こそ、なまめかしく……二七
第十七段　山寺にかきこもりて……二七
第十八段　人は已をつゞまやかにし……二八
第十九段　をりふしの移りかはるこそ……二九
第二十段　なにがしとかやいひし……三一
第二十一段　万のことは、月見るにこそ……三二

第二十二段　何事も、古き世のみぞ……三三
第二十三段　衰へたる末の世とはいへど……三四
第二十四段　斎王の、野宮におはします……三五
第二十五段　飛鳥川の淵瀬常ならぬ世……三五
第二十六段　風も吹きあへずうつろふ人の……三七
第二十七段　御国ゆづりの節会……三八
第二十八段　諒闇の年ばかりあはれなる……三八
第二十九段　しづかに思へば……三九
第三十段　人のなきあとばかり悲しきは……四〇
第三十一段　雪のおもしろう降りたりし朝……四一
第三十二段　九月廿日の比……四二
第三十三段　今の内裏作り出されて……四三
第三十四段　甲香は、ほら貝のやうなるが……四三
第三十五段　手のわろき人の……四四
第三十六段　久しくおとづれぬ比……四四
第三十七段　朝夕へだてなく馴れたる人の……四四
第三十八段　名利につかはれて……四五
第三十九段　或人、法然上人に……四七
第四十段　因幡国に……四八
第四十一段　五月五日、賀茂のくらべ馬を……四八
第四十二段　唐橋中将といふ人の子に……五〇
第四十三段　春の暮つかた……五〇
第四十四段　あやしの竹の編戸のうちより……五一
第四十五段　公世の二位のせうとに……五三
第四十六段　柳原の辺に……五三
第四十七段　或人、清水へ参りけるに……五三
第四十八段　光親卿、院の最勝講奉行して……五四
第四十九段　老来りて、始めて道を行ぜん……五五
第五十段　応長の比、伊勢国より……五六
第五十一段　亀山殿の御池に……五七
第五十二段　仁和寺にある法師……五八
第五十三段　これも仁和寺の法師……五八

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

第五十四段　御室に、いみじき児の……六〇
第五十五段　家の作りやうは……六一
第五十六段　久しくへだゝりて逢ひたる……六二
第五十七段　人の語り出でたる歌物語の……六三
第五十八段　道心あらば……六三
第五十九段　大事を思ひ立たん人は……六五
第六十段　真乗院に盛親僧都とて……六六
第六十一段　御産のとき甑落す事は……六八
第六十二段　延政門院いとけなく……六九
第六十三段　後七日の阿闍梨……六九
第六十四段　車の五緒は……七〇
第六十五段　この比の冠は……七〇
第六十六段　岡本関白殿……七〇
第六十七段　賀茂の岩本・橋本は……七二
第六十八段　筑紫に、なにがしの押領使……七三
第六十九段　書写の上人は……七四
第七十段　元応の清暑堂の御遊に……七五
第七十一段　名を聞くより、やがて面影は……七五
第七十二段　賤しげなる物……七六
第七十三段　世に語り伝ふる事……七六
第七十四段　蟻のごとくに集まりて……七八
第七十五段　つれ〴〵わぶる人は……七九
第七十六段　世の覚え花やかなるあたりに……八〇
第七十七段　世中に、その比人の……八〇
第七十八段　今様の事どもの珍らしきを……八一
第七十九段　何事も入りたゝぬさましたる……八二
第八十段　人ごとに、我が身にうとき事……八二
第八十一段　屏風・障子などの絵も文字も……八三
第八十二段　羅の表紙は……八四
第八十三段　竹林院入道左大臣殿……八五
第八十四段　法顕三蔵の、天竺に渡りて……八五
第八十五段　人の心すなほならねば……八六

第八十六段　惟継中納言は……八七
第八十七段　下部に酒飲ますること……八七
第八十八段　或者、小野道風の書けること……八九
第八十九段　奥山に、猫またといふもの……八九
第九十段　大納言法印の召し使ひし……九一
第九十一段　赤舌日といふ事……九一
第九十二段　或人、弓射ること習ふに……九三
第九十三段　牛を売る者あり……九三
第九十四段　常榮井相国、出仕し給ひける……九五
第九十五段　箱のくりかたに緒を付くること……九五
第九十六段　めなもみといふ草あり……九六
第九十七段　その物につきて……九六
第九十八段　尊きひじりの云ひ置きけること……九六
第九十九段　堀川相国は……九七
第百段　久我相国は……九八
第百一段　或人、任大臣の節会の内弁を……九八
第百二段　尹大納言光忠入道……九九
第百三段　大覚寺殿にて……一〇〇
第百四段　荒れたる宿の……一〇〇
第百五段　北の屋かげに消え残りたる雪……一〇二
第百六段　高野證空上人……一〇三
第百七段　女の物言ひかけたる返事……一〇四
第百八段　寸陰惜しむ人なし……一〇五
第百九段　高名の木のぼりといひし……一〇七
第百十段　双六の上手といひし人に……一〇八
第百十一段　囲碁・双六好みて……一〇八
第百十二段　明日は遠国へ赴くべしと……一〇九
第百十三段　四十にもあまりぬる人の……一一〇
第百十四段　今出川のおほい殿……一一〇
第百十五段　宿河原といふところにて……一一一
第百十六段　寺院の号、さらぬ万の物にも……一一三
第百十七段　友とするにわろき者……一一三

第百十八段　鯉の羹食ひたる日は……一二四
第百十九段　鎌倉の海に鰹と云ふ魚は……一二五
第百二十段　唐の物は、薬の外は……一二五
第百二十一段　養ひ飼ふものには、馬・牛……一二六
第百二十二段　人の才能は……一二七
第百二十三段　無益のことをなして……一二八
第百二十四段　是法法師は、浄土宗に恥ぢず……一二九
第百二十五段　人におくれて、四十九日の……一二九
第百二十六段　ばくちの、負きはまりて……一三〇
第百二十七段　あらためて益なき事は……一三一
第百二十八段　雅房大納言は、才賢く……一三一
第百二十九段　顔回は、志、人に労を施さじ……一三三
第百三十段　物に争はず……一三三
第百三十一段　貧しき者は財をもて礼とし……一三四
第百三十二段　鳥羽の作道は……一三五
第百三十三段　夜の御殿は東御枕なり……一三五
第百三十四段　高倉院の法華堂の三昧僧……一三六
第百三十五段　資季大納言入道とかや……一三八
第百三十六段　医師篤成、故法皇の御前に……一三九
第百三十七段　花はさかりに、月はくまなき……一三〇
第百三十八段　祭過ぎぬれば、後の葵不用……一三五
第百三十九段　家にありたき木は……一三六
第百四十段　身死して財残る事は……一三八
第百四十一段　悲田院の堯蓮上人は……一三八
第百四十二段　心なしと見ゆる者も……一四〇
第百四十三段　人の終焉の有様の……一四一
第百四十四段　栂尾の上人……一四三
第百四十五段　御随身秦重躬……一四三
第百四十六段　明雲座主、相者に逢ひ給ひて……一四三
第百四十七段　灸治、あまた所に成りぬれば……一四四
第百四十八段　四十以後の人、身に灸を……一四四
第百四十九段　鹿茸を鼻にあてて……一四四

第百五十段　能をつかんとする人……一四五
第百五十一段　或人の云はく、年五十になる……一四六
第百五十二段　西大寺静然上人、腰かゞまり……一四六
第百五十三段　為兼大納言入道召し捕られて……一四七
第百五十四段　この人、東寺の門に雨宿り……一四七
第百五十五段　世に従はん人は……一四八
第百五十六段　大臣の大饗は……一五〇
第百五十七段　筆を執れば物書かれ……一五〇
第百五十八段　盃のそこを捨つる事は……一五一
第百五十九段　みなむすびといふは……一五二
第百六十段　門に額懸くるを……一五二
第百六十一段　花のさかりは……一五三
第百六十二段　遍照寺の承仕法師……一五三
第百六十三段　太衝の太の字……一五四
第百六十四段　世の人あひ会ふ時……一五四
第百六十五段　あづまの人の都の人に交り……一五五
第百六十六段　人間の営み合へるわざを……一五五
第百六十七段　一道に携はる人……一五五
第百六十八段　年老いたる人の……一五七
第百六十九段　何事の式といふ事は……一五八
第百七十段　さしたる事なくて……一五八
第百七十一段　貝をおほふ人の……一五九
第百七十二段　若き時は、血気うちにあまり……一六〇
第百七十三段　小野小町が事……一六一
第百七十四段　小鷹によき犬……一六二
第百七十五段　世には心えぬ事のおほきなり……一六二
第百七十六段　黒戸は、小松御門位につかせ……一六六
第百七十七段　鎌倉中書王にて……一六七
第百七十八段　或所の侍ども、内侍所の……一六八
第百七十九段　入宋の沙門、道眼上人……一六八
第百八十段　さぎちやうは……一六八
第百八十一段　ふれ〳〵こゆき……一六九

第百八十二段　四条大納言隆親卿……一七〇
第百八十三段　人つく牛をば角を切り……一七〇
第百八十四段　相模守時頼の母は……一七一
第百八十五段　城陸奥守泰盛は……一七二
第百八十六段　吉田と申す馬乗の申し……一七二
第百八十七段　万の道の人……一七三
第百八十八段　或者、子を法師になして……一七四
第百八十九段　今日はその事をなさんと……一七七
第百九十段　妻といふものこそ……一七八
第百九十一段　夜に入りて物の映えなし……一七九
第百九十二段　神仏にも、人のまうでぬ日……一八〇
第百九十三段　くらき人の、人をはかりて……一八〇
第百九十四段　達人の人を見る眼は……一八一
第百九十五段　或人久我縄手を通りけるに……一八三
第百九十六段　東大寺の神輿……一八三
第百九十七段　諸寺の僧のみにもあらず……一八四
第百九十八段　揚名介に限らず……一八四
第百九十九段　横川行宣法印が申し侍りしは……一八五
第二百段　呉竹は葉ほそく……一八五
第二百一段　退凡・下乗の卒都婆……一八五
第二百二段　十月を神無月と云ひて……一八五
第二百三段　勅勘の所に靱かくる作法……一八六
第二百四段　犯人を笞にてうつ時は……一八七
第二百五段　比叡山に、大師勧請の起請……一八七
第二百六段　徳大寺右大臣殿……一八七
第二百七段　亀山殿建てられんとて……一八八
第二百八段　経文などの紐を結ふに……一八九
第二百九段　人の田を論ずるもの……一九〇
第二百十段　喚子鳥は春のものなり……一九〇
第二百十一段　万の事はたのむべからず……一九一
第二百十二段　秋の月は、限りなくめでたき……一九二
第二百十三段　御前の火炉に火をおく時は……一九三

第二百十四段　想夫恋といふ楽は……一九三
第二百十五段　平宣時朝臣、老ののち……一九四
第二百十六段　最明寺入道……一九五
第二百十七段　或大福長者の云はく……一九五
第二百十八段　狐は人にくひつくものなり……一九八
第二百十九段　四条黄門命ぜられて云はく……一九九
第二百二十段　何事も辺土は、賤しく……二〇〇
第二百二十一段　建治・弘安の比は……二〇一
第二百二十二段　竹谷乗願房、東二条院へ……二〇一
第二百二十三段　田鶴の大臣殿は……二〇二
第二百二十四段　陰陽師有宗入道……二〇三
第二百二十五段　多久助が申しけるは……二〇三
第二百二十六段　後鳥羽院の御時……二〇四
第二百二十七段　六時礼讃は……二〇五
第二百二十八段　千本の釈迦念仏は……二〇五
第二百二十九段　よき細工は……二〇六
第二百三十段　五条内裏には……二〇六
第二百三十一段　園の別当入道は……二〇六
第二百三十二段　すべて人は、無智無能……二〇八
第二百三十三段　万のとがあらじと思はば……二〇九
第二百三十四段　人の物を問ひたるに……二〇九
第二百三十五段　ぬしある家には……二一〇
第二百三十六段　丹波に出雲と云ふ所あり……二一一
第二百三十七段　柳営に据ゆるものは……二一三
第二百三十八段　御随身近友が自讃とて……二一三
第二百三十九段　八月十五日、九月十三日は……二一八
第二百四十段　しのぶの浦の蜑の見るめも……二一八
第二百四十一段　望月のまどかなる事は……二二〇
第二百四十二段　とこしなへに違順に……二二一
第二百四十三段　八つになりし年……二二二

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目次

解題……二三五
一　作者、その略伝……二三五
二　作品……二三七
1　成立年時……二三七
2　内容……二四〇
三　諸本……二四七
四　在来の研究――その素描――……二四九
五　参考文献……二五五

凡例

一、本書の底本には、いわゆる烏丸光広本(二四八ページ参照)を用い、直接には、日本古典全集「徒然草」所載の複製によった。校訂の方針などについて諸書を参照したが、なかんずく、岩波文庫「徒然草」(昭和四十二年刊の第五十刷本)、「改訂版徒然草総索引」、「徒然草全注釈　上・下」の恩恵が大きい。

一、全二百四十四段に区分し、それぞれに序段から第二百四十三段に至る段数を示した事は、以下の条々の大部分ともども、通行の諸書と同じである。

一、段落に分かち、会話文・引用文などにかっこを施した。句読点については、底本におけるそれの存否に拘束されず、適宜付した。

一、用字法・かなづかい・送りがな等は、必要に応じて諸種の手当てを施した。漢字は新字体で統一した。底本がかなであるのを漢字に改めた箇所、および、比較的難読の語を中心として、ふりがなを付した。この二つの別はいちいち示していない。なお、このうち、後者の場合は、厳密な考証を経ていないものも多いので、あくまでも便宜的なものにすぎない。

一、底本にはかなりの濁点が見られる。これらは、日葡辞書の清濁の別と「すべてといっていいほどよく一致している」（岩波文庫凡例）が、光広本の書写年代における発音を反映していても、無論、数百年をさかのぼるこの作品の成立時の発音を正しく伝えているかどうかには疑問がある。そこで、中古・中世の諸辞書など国語資料を参照し、慎重に、なお濁点を施したが、底本の濁点を削除する事はしなかった。

一、反復記号の箇所は、その語が上の語と品詞をことにする場合にかなに改めた以外は底本どおりだが、漢字の下にある記号は「々」に、かなの下のは「ゝ」に統一した。

一、校異は、特に重要と考えられるもののみ頭注欄に示した。その他の異同は、高乗勲氏「徒然草の研究」などを参照されたい。

一、頭注は厳選主義を採り、原則として、辞典などで容易に検索しうるものは省き、人名・地名・書名など固有名詞中心とし、出典なども、必要度に応じて取捨を決定した。付した場合の解説も簡略を旨とした。

一、終わりに、本書の作成にあたっては、本文・頭注・解題など、すべて三木紀人氏を煩わしたことを、特にお断りしておく。

序段

つれ〴〵なるまゝに、日くらし、硯にむかひて、心に映りゆくよしなし事を、そこはかとなく書きつくれば、あやしうこそものぐるほしけれ。

第一段

いでや、この世に生れては、願はしかるべき事こそ多かめれ。

御門の御位はいともかしこし。竹[1]の園生の末葉まで、人間の種ならぬぞやんごとなき。一の人の御有様はさらなり、たゞ人も、舎人など給はるきははゆゝしと見ゆ。その子・孫（うまご）までは、はふれにたれど、なほなまめかし。それより下つかたは、ほどにつけつゝ、時にあひ、したり顔なるも、みづからはいみじと思ふらめど、いとくちをし。

1 「史記」の梁の孝王に関する故事から来た語で、ここは天皇の子・孫をさす。

1 清少納言の「枕草子」（前田家本）に「思はん子を法師になさむこそ、いと心苦しけれ。同じ人ながら、烏帽子・冠のなきばかりに、木の端などのやうに人の思ひたるよ」とある。

2 天台宗の高僧。比叡山で出家したが名利をいとい大和多武峰に隠遁、聖僧として仰がれた。奇行が多かった事も有名。一〇〇三年寂、八十七歳。「発心集・一」に、「名聞こそくるしかりけれ。かたゐのみぞたのしかりける」という彼の言が見られる。

法師ばかり羨ましからぬものはあらじ。「人には木の端のやうに思はるゝよ」[1]と清少納言が書けるも、げにさることぞかし。いきほひまうに、のゝしりたるにつけて、いみじとは見えず。増賀[2]ひじりのいひけんやうに、名聞ぐるしく、仏の御をしへにたがふらんとぞおぼゆる。ひたぶるの世すて人は、なか〳〵あらまほしきかたもありなん。

人は、かたち・ありさまのすぐれたらんこそ、あらまほしかるべけれ。物うちいひたる、聞きにくからず、愛敬ありて、言葉おほからぬこそ、飽かず向はまほしけれ。めでたしと見る人の、こゝろ劣りせらるゝ本性みえんこそ口をしかるべけれ。

しな・かたちこそ生れつきたらめ、心はなどか、賢きより賢きにも移さば移らざらん。かたち・心ざまよき人も、才なく成りぬれば、しなくだり、顔憎さげなる人にも立ちまじりて、かけず、けおさるゝこそ、本意なきわざなれ。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com